

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: NY Subway ① Broadway - 7 Avenue Local)

## 《ぶらりマンハッタン救急車の旅 Part-1》

生まれてからたった一度だけ、救急車に乗せられたことがある。その救急車は、あの“ツイン・タワー”として親しまれたワールド・トレード・センタービル（WTC）発だった。テロリストの手によって崩壊してから4年以上の月日が流れたが、あのビルには個人的にもニューヨークでの思い出がたくさん詰まっていた…。

1995年の春だったと思うが、一週間ほど空咳が治まらないことがあり、ウエイターとして働いている手前、咳が出るとお客さんに不快感を与えてしまうので、咳止めの薬だけでも貰っておこうと出向いたのがWTC内にあった内科だった。WTC内の病院に決めたのは、松本先生という日本人の先生がいると人から聞き、単に診察結果や薬の手続き等に関して、日本語の方が理解しやすいという理由からで、その日も乗換を待たずからウエイターの仕事があった。

結局、診察室に入ると診てもらったのは白人の男の先生だったが、「念の為レントゲンを撮ってみよう」と言われたので、成すがままに応じ、一人ボツと診察室で待つこと15分余り。窓の外には通りを行き交う人の姿。タクシーやバスが往来する光景が見え、いつも通りのニューヨークの街の喧騒が窺えた。日差しもポカポカと穏やかそうで、静寂に包まれた病室の中、「屋は何を食べようかなあ」なんてぼんやりと外を眺めていた…。

すると足早に駆けてくる音が聞こえ、自分の待つ部屋のドアが勢いよく開いた。さっき診察してくれた白人の先生が一言「Don't Move」と両手の平を自分に向ける。何のことやら状況が把握できないまま、とりあえず言われるがままに静止していると、その先生の後に続いて、もうひとりの先生が部屋に入ってきた。それが松本先生だということは直ぐに察知できたが、未だ状況が把握できず、「何、癌か?」「エイズじゃないだろうな」なんて不安だけが頭を過ぎった。

結果的には、「自然気胸」といって、肺の周囲を保護するように覆う胸膜に何らかの原因で穴が開き、そこに空気が入り込むことによって肺を圧迫しているような状況と分かった。その白人の先生が「もう少しして見落とすところだった」と、レントゲン写真片手に説明してくれたが、痛みなどの症状が全くない自分にとっては、事の重大さをいまいち飲み込めずにいた。

松本先生から、とりあえず命に別状はないものの直ぐに入院が必要で、手術まで行かない程度の処置を施す必要があり、入院は一週間から10日になるだろうと聞かされた。「入院」の一言はさすがにショックだったが、それに加えて、未だ嘗て体にメスを入れたことがないのがささやかな自慢でもあった自分にとって、「手術まで行かない程度の処置」って何だろうと不安でいっぱいになった。

「今から入院で言われても何も用意してないので、とりあえず一度帰らせて下さい」なんて甘えてみたものの許されず、再び「Don't Move」という声と共に簡易ベッドに固定されてしまった。暫くすると、ガタイのいい白人の警官が入って来て、一瞬ニコツと微笑むと「これにサインしろ」なんて書類を差し出す。どうやら、こちらでは救急車出動の要請が入ると必ず警官の立会いが必要になるようだったが、冷静に読んでも意味も分からなそうだし、とりあえず、言われるがままに2箇所ほどサインした。勿論、不安と緊張で他人には解読不能なミズが違うようなサインだったが、まあ、そんなことはどうでも良かった。

「とりあえず、今日仕事が入ってるんですけど」なんて再度無駄な抵抗をみせたものの、これも許されず、店に連絡しておいてくれるとすることで松本先生にレストランの電話番号を手渡し、慌しさの中簡易ベッドごと診察室を連れ出された。口には酸素ボンベ用のマスクがあてがわれた。

この只ならぬ状況下、本来なら「自然気胸」を発見してくれたあの白人の先生に感謝すべきだったが、若気の至りにそんな余裕もなく、このまま病院へと搬送され入院させられることは免れられまいと割り切るのが精一杯だった。だが、一旦腹を据えると、何故か楽観的になり、全てを成すがままに受け入れようとする自分がいた。

エレベーターで階を下がると、1階で扉が開いた。少し首を上げて辺りの様子を伺うと、WTCの1階、コンコースのど真ん中に出た。そのまま真直ぐに伸びた長いフロアを直進する。否が応でも、行き交うビジネスマンや買い物客、観光客の視線を浴びるが、何故か注目されることにちよっぴり英雄的な快感を覚えたりもした。

一気にフロアを駆け抜けると、待機する救急車に押し込まれた。仰向けに寝かされながら、「これが救急車か。中は意外に狭いなあ」なんて他人事のように感動してみたり、救急隊員と2、3言葉を交わした記憶があるが、毎日BGMのように街中に鳴り響いていた救急車のサイレンが自分の真上で鳴り響くことに再びささやかな感動を覚えたりしながら、ノンストップでマンハッタンの街中を走り抜ける。

この後に体験する地獄絵図のような光景を想像するまでもなく「肺に穴開いた男」（厳密には胸膜でしょうか…）に乗せた救急車は、ニューヨークの老舗ジャズ・クラブ「ヴァレッジ・ヴァンガード」に程近い「セント・ヴィンセント病院」を目指した…。(つづく)

尚、2001.9.11のテロの後、インターネット上で松本先生達は皆無事だったというニュースを拝見しました。

(つづきは、『The Walker Vol.5』(2006年4月発行予定)誌面にて)